縄文土器底部にみられる網代圧痕について―北陸地方を中心に―

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2830

縄文土器底部にみられる網代圧痕について
―北陸地方を中心に―

松永　篤知

縄文土器の外底面には、土器製作時に敷物として利用された編み物や木の葉などの圧痕が残されていることがある。本稿では、特に「網代圧痕」の編み方に注目し、東日本・西日本の境界をはじめとした地域的特徴や時代的変遷について検討した。対象地域は、東西文化の交流の場として重要な北陸地方を中心に取り扱った。

分析の方法としては、坪井正五郎氏の方法を基本とした。「超え」・「潜り」・「送り」の本数で網代の編み方を分類し、各遺跡における編み方の種類とその数量について地域別に検討した。富山県29遺跡、石川県43遺跡、福井県10遺跡、新潟県上越・中越地方7遺跡、岐阜県飛騨地方6遺跡の網代圧痕および全国16遺跡の実物資料について編み方の分析・考察を行った結果、以下の知見が得られた。

(1)北陸全体では、2本超え2本潜り1本送りを主体とするが、富山県の東端に位置する境Ａ遺跡より東は2本超え1本潜り1本送りが主体となり、現在の富山県・新潟県の県境付近に東日本・西日本の境界があったものと考えられる。その要因としては、親不知周辺の地理的特徴が少なからず関与していたものと考えられる。

(2)石川県の加賀地方と岐阜県の飛騨地方では、中期に東北型網代圧痕の類が多く見られるが、その要因としては多雪地帯という気候条件が考えられる。この編み方は、中期前葉における東北地方との交流の中で、北陸の多雪地帯に広まったものと考えたい。

(3)飛騨地方には、2本超え2本潜りで1本送りと2本送りが交互するものが多数見られるが、2本超え2本潜り1本送りを基に生み出されたものであると考えられ、西日本に属するものと考えられる。しかし後期には2本超え1本潜り1本送りが主体となり、東日本の人間が、この時期に多く入ってきた可能性がある。

(4)網代編みの実物資料には圧痕に見られるような地域性が見られないが、その理由としては、カゴのような実物資料と、圧痕として残っている土器製作用の敷物は、異なる編組技術によるものであったことが考えられる。土器製作時の敷物のみにおいて独自の編み方が生み出され、東日本・西日本というような網代圧痕の境界が生み出されたものと考えられる。

一応本稿の第一の目的である、日本海側における網代圧痕の東西の境界について明らかにすることができ、実物資料との比較からその成立要因についてまで推測することができた。しかし、その他の圧痕との関係や土器型式との対応関係などについては検討することができず、今後の課題として残すこととなってしまった。